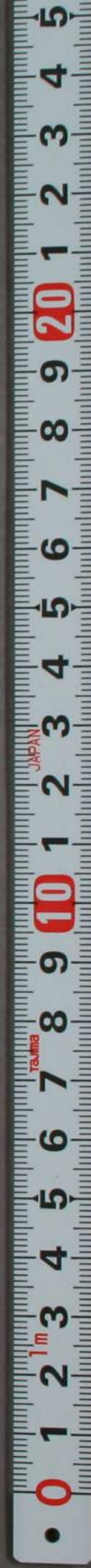


991
1
13
造





論心學之要

論心學之要 論心學之要 論心學之要

論心學之要 論心學之要 論心學之要

論心學之要 論心學之要 論心學之要

論心學之要 論心學之要 論心學之要

論心學之要 論心學之要 論心學之要

論心學之要 論心學之要 論心學之要

遠
明
號
卷

天狗



天狗藝術論叙



王喜

大九為劍術之業。要令以刀形熟支體故諸
家混混而設表裏數品之形矣。蓋支體既整
而知變化之用。因形體之運轉隨變化之動
靜而覺彼我之虛實。正己之心。思而自知。未
崩之勝敗。所謂殺人刀活人劍。全非以形體
論之。心思手足能應變化之法。則生殺之柄
在我而不在人矣。然近世以刀法鳴於世之



士多焉一流分萬派雷同而教子弟或說以
高遠之理導門下能學之則言治天下國家
或教以左右前後之刀形而言一人敵十人
或練正心氣則居而所向必言得全勝嗚呼
是皆高遠偏僻之教而非刀劍之正術習者
亦受授師傅之謬而因是以教子弟所謂一
犬吠虛而萬犬傳實舉而不歎哉是故失其
樞紐而或苦支體之業或勞練心之術者亦

不為不少矣粵有佚齋樗山子者連年委心
於聖賢之域苦思於武門之林然世之習刀
劍者歎失其本而馳其末泥其理而捨其業
悉違刀劍之正理而綴天狗藝術論一帙以
授童蒙始詫天狗之妖言而言刀法之正理
終談兵馬諸藝之至理遂歸克養心氣之論
而止實使士人知其要道且夫自淺至深自
下至高者則天下之綱紀而此書盡焉為士

者依此教而學兵習劍則恐廢乎其不差矣
享保十三歲次戊申臘月良辰

東莖江城豊嶋郡隱士

神田白龍子叙



天狗飛六術論卷一

佚齋樗山述

大意

人ハ動物を王する者ヲ勤ガ家内ハ必不善ヲ
シテ此会ハ生セされハ彼会ハ生バ
種々變シテ止ガる者ハ人の心ヲミ
ん神哉悟テ直ニ自性乃天則小テさ
とハん術ヲ志シテ學の熟セるに
スルハハギ家不なる故ニ聖人初學
のニハ
イテモ
ナリ此より終シテ大石のんは原の入り

とをけりし幼年の時より六藝云は遊
戯もきは心まとする所ありて自鄙倍の
秘宝よ遠さうり玩物我好乃此人と淫
するなく放傲邪侈の此身成危ふするま
し外みハ助骨の束成固くして病成生
する事なく内みは玉家此備へて成りて
其福成徳しく世に達してん術成流すれ
時ハ大乃の助とある一藝云小きありとて
是成流んする事なく亦藝成以乃とする
淫里あることなりき

天狗云術論

一 劍術者あり曾ておしへて古へ源至我經の
牛ありといひし時鞍馬の奥入るく大小を
天狗と余令し劍術乃奥云成極めて後
美濃の圃赤坂名宿におわく熊坂といふ
漁盗し出合牛あり一人して大勢其西遊と
をを追拂ひ熊坂成討留給ふといひ傳ふ
里我此乃志強く終つて一年あらずといふ
未その奥云成極めて其ころ海克さる
所あり我をまて山中よ入天狗よ奪て此

乃の極則成信つんと兼中ひとり保山の
くよ入石上小座しく観念し天狗成す
事教多々毎教かくのこしくすれは各各
外し或兼山中凡起い物すきは此れ
少くは赤く鼻言くつてさき生てく
ぬすさるる老成人とりよこもれく
てくき合其了急おび多しく
あひくみまれの梢小座して一人の回理
形かき無よよめて其用あは家無あ
其理入るへく太極の妙用も陰陽乃
変

化よよめてあはれ人々の天理ハ四端の情
よの事いれれ剣術ハ勝負乃事なりと
いとも其極則及てハん其自然此妙用
あはれといふ事れし然とも初学の士ハ
此よ至家こくし故よ古人の教ハ形乃自
然に去こいれて後横順逆此れが
管小しく強ふことれく筋骨を
正し手足乃を習えし用よ
変小應するもの事其熟きれハん
といとも其用よ應するもの事ハ

孫子兵法 卷一

氣故以て修す氣ハ心を裁く形故使小若
まると故よ氣ハ生活しく滞ることれく利
健みして屈せざる故要との事の中よ至
理故令んて其の自然よ叶ふ事乃熟也
流よまると氣融和し其少くむ下
理おのづからあつたれん母徹してこと
なまると此ハ事理一致ありて氣収り神
定めて應用せ碍たり是れ一の藝
術終りの段なり故小藝術ハ修練
を要とい事熟せされハ氣融和せれば融

和せされハ氣融和せるといふこと
て自在なまるとありて
一 亦一人回刀ハ切ふ物あり陰ハ突く物あり
此亦何の不用を力用ひんま形ハ氣子従
ひ氣ハんよまると氣融和せざる時ハ氣動
ずることれくんありて物なき時ハ
氣もあつて和して此よまると氣融和せざる
應ずんよものあるは此ハ氣室にても是
其用不應せの事よん故任ふと此ハ氣
此よ滞つて融和せしんを容く強む時

ハも此虚^{まよ}ありて弱^{よか}し之^いを起^{おこ}して活^{くわ}を
取^とりて火^かを吹^ふき去^きる^る勢^{いきま}の^つる^るに凝^こる^るこ
氣^き先^{さき}づい^いと^と此^こを^を燥^{くわ}き^きト^と不^ふ付^つハ凝^こる^るこ
を^まし^し待^{まち}て^て應^おぜん^んと^とす^すれ^れハ^ハ足^あ合^あと^とい^いふ^ふも
の^のよ^よな^なり^りと^とみ^みの^のこ^こに^に已^おれ^れた^た事^{こと}を^を一^{いっ}歩^ぽを
進^{すす}む^むこ^こと^とあ^あら^らむ^むに^に却^{かえ}り^りて^て敵^{てき}の^のこ^こを^を不^ふ弄^{ろう}せ
ら^らぬ^ぬ中^{ちゆう}に^に待^{まち}付^つの^の中^{ちゆう}に^に應^おぜん^んと^とす^す
あ^あら^らむ^むこ^こと^とあ^あら^らむ^むこ^こに^に應^おぜん^んと^とす^す
中^{ちゆう}に^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}

ま^まら^らむ^むこ^こと^とあ^あら^らむ^むこ^こに^に應^おぜん^んと^とす^す
さ^さら^らぬ^ぬ者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むこ^こに^に應^おぜん^んと^とす^す
の^のこ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}
こ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}
ま^まら^らむ^むこ^こと^とあ^あら^らむ^むこ^こに^に應^おぜん^んと^とす^す
こ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}
こ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}
こ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}
こ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}
こ^こに^に應^おぜん^んと^とす^すは^は健^{けん}ある^る者^{もの}よ^よあ^あら^らむ^むと^と扣^{くわ}

ともいはず。是を向ふは、
の大元乃を以て者より、氣の位を、
系下あつて然まども是を以て若とす、
小ハ何れ彼ハ大ハ何れ推す、
滞なく、血氣は任せて、
て、無んを執るものなり、
の應用小して、
一ハ元あつて相あふものは、
つす、僅ま会より、
あつて、款其く、

なまよ、此ハ元和して、
ある時、
は用ひずして、
の、
明是、
た、
在、
の、
さ、
あ、

修もせば生涯しやうざい取とりてし得とるこころあへず
ん能とく一藝い云いふ徹とく其他たハ習なむべ
てちるべき事ことなり

一亦一人ひと回まわりハ切きふものちり塗ぬハ突つ物ぶつちり
とりハ勿な論ろんの美うなり然しかとも是こ理りよるて
事こと乃すなはち用もちなまらざれものちり切きハ切き事こと
あつと突つよつて事こと何なにり事こと乃すなはち用もちをまらざ
ふと此こハ物ものハ庶あするこころ偏へんちり心こころ割わき
といふも形かたち消くく此こハ中なかふまらき所ところハあ
らり事ことの理ことわり遠とほハ遠とほすべき所ところハまらべ



中野

みそ子の言の如きは擇て精しくして清て洋
ありすしりふものなりん神拜悟去るりと
て神傷不政を執しめ一方はた大ねとして教
を攻むい出まよしく其功はまらんやそんハ塵
勞の恵の蓄へるしやいとももてりよ熟
セざふんん用はなされ思らぬ計は
矢は放のこしハ誰と立ちくる事ちら然
ともも乃よ申しに其事不熟せばみらに
るを引矢を愛いともハ能的よあさる
はまき成貫ことあさるべ必其志心くその

汎直くは熱身不充て生活しその性に
特ことあくろと我と一神よ成り精神
天地よ満るうごくと引て穀みよけ永時神
定けし會は部することなく、せんみりて
愛いをれして後從本の我をり物不中
て後静不ろ成かさむ此ら乃の習ひを
アウののぞくんハ遠く矢は送アよ堅
成貫くろ矢ハ本竹成以て他アくる物
なりといても我精神これ一神なるを
きハらよ神あましくてもめくれこし是

意識の才覚を以て得る事ありては程を
多て知べし事なし心小徹し事小執つ
修練之功を積みあはせればこそめあはる
ことありては事あり内志正しことあり
神速しことあり筋骨乃米秣固しことあり
熱身小充されハ強故引てこそつ事あり
たは神定まり氣生活することなく私意
の才覚を用ひてこそ乃しよす力故以
ち故押法故引てはことありの性小さく引て
弓と我とお争ひてこそニツ小ちり精神

相通することなく却て弓の力を妨げ勢
を脱ゆへて遠く矢を送りてこそ其を
費することあり

一回用人事しきことありのこゝろ志正し
すむい直りしされハ事小事へくたれく
父母小事へく孝れく親戚朋友は信臣
人侮りし物とるしひ立ことありハ
変れん事小事小充さ家小ハ内病故生し
心小く事小當りて候ることあり屈
することあり大義を立家ことあり

物の性不情小時ハ人情反ク物とて子れニ事
 和セざるし此ハ事おハ家祿定ルキ時也
 うこひ多くして事決セハ念動する時
 ハ内おこるなりぬるや誤多し多し
 一心動セざる時ハ氣動することれキ事自
 然ヨキことふしりハ理祿の本然より説下
 して其標的を示すもの事故修すること
 ハ世用此甚チなりと云ふはありの理ハ上
 至説下ハ終外ハ下より上の上執こと也
 の中なり人んこと不習れハ性ハ率

て情欲ハ牽進スル時ハ祿困むことれキ物
 子操りて應用を碍ちり故ハ大学ハ道
 在明明徳といハ中庸ハ性之謂也
 と云ハ大なる上より説下して学者其
 標的志也其ものなり然も凡情妄心の
 惑ひ深ク此變ハ変化して直ハ自性乃
 冥明再ハハあては是を以て格物
 致知謙玄誠人の工夫を説き自反性極
 の交用を説く終外の実地を端しむ是
 事の熟セざるなりと云ふなり剣術もま

然^レ子^レ款^ニ向^テひて生^レた忘^レ死^レた^レ是^レれ款
 故^ニすれ我^ヲを忘^レて念^ノ動^セん^ニ忘^レた作
 さ^レん^ニあ^リて自然^ニ乃^レ感^レ不^レ仁^スす^レん^ニ死^ハ
 變化自在^ニ小^ニく應用^ヲを碍^リち^リ多^ク勢
 の款^乃中^ニ小^ニあ^リて^レた^レ後^左太^右より切^レけ突
 けて此^形ハ微^塵よなれ^トも^レれ^レ収^マリ^レ抹^サ
 じ^マり^レく^レす^レも^レ變動^スる^レこ^トも^レれ^レく^レ子^路
 の冠^冠は^正い^ハく^レくる^レは^豈よ^クた^レや^レく
 しく^倒進^んは^是劍^術の極^則ち^り然^カ
 此^道は^足代^ちなく^レく^レ直^小登^ノノ^教べき^レる

一 又吾子^レ劉^健あ^リて^レた^レよ^クある^レもの^トい^ハ法
 流^ハ破^家とい^ハ兵^法よ^加く^レあ^リく^レ吳^{なり}
 彼^ハ女^方なり^破とい^ハハ^レ劉^健治^をは
 て款^故脚^下に^踏ま^き況^字も^も恐^レバ^處
 とも^亦規^むべ^一途^亦款^乃本^陣に^志さ^レ

一 一 又吾子^レ劉^健あ^リて^レた^レよ^クある^レもの^トい^ハ法
 流^ハ破^家とい^ハ兵^法よ^加く^レあ^リく^レ吳^{なり}
 彼^ハ女^方なり^破とい^ハハ^レ劉^健治^をは
 て款^故脚^下に^踏ま^き況^字も^も恐^レバ^處
 とも^亦規^むべ^一途^亦款^乃本^陣に^志さ^レ

て大石の落ぐ家こしく切こむなり然ども
 をけあして氣溢るるときハ事の功者小あて
 表裏小陥ふことあり凡乃換得を去るざ
 此時ハあやまらへり故凡凡也習に何り守
 ておのまねばし一まて凡凡こふこもなく
 志まふこもなく生死を忘せ進んでう
 こがふ事なきものなる凡を以破るあり
 心を以てぶる何りともみ一ちりん氣一
 されハ破るこもあさる凡此劍術乃初門初
 学の入すれ乃節なり但し凡怯弱をば

不あひて僅小疑惑する所あれときハ此術
 のたつべし凡凡終練ありん疑惑を
 去乃工夫あり然ども只一偏の氣象あり
 しん此應用を碍自在乃妙術ハあり
 此不あひて洋ふ工夫を身ひ理月々功
 積る鋭凡ありんやるハ熱して本俵ふ
 玉ありし初学より其物の工夫れこなき
 ハ骨を失ふハ功なき一
 一其中小大天狗とそくして鼻とさして
 長く凡羽翼も甚く見え凡衣冠正し

く座と小ありて謂て曰各の論ひる不みを
理なきよりの右ハ情篤く志し親切
し事ヲ救ふこと健ふして屈するこ
なく息ふことあり師乃侍ふ不を伝
て昼夜心不工夫し事ふころこ
此こととば友小侍の終ひ熟して昔と
程を惜ふゆへ内ハ徹すること涼
師ハ始め事を侍へく其令むところ
ら自井ふを侍のく是故引而不
引不吝して流しざるよはあは此
るにんを引

て終ひ熟せんこと成欲るのく才子んを
して工夫し自得する所あれハ從性
子向師もんふけんと此ハ是故許
のあり愛して愛ゆれことれし唯
術はく不あり孔子曰一隅を
隅を以て及ふせされきハ復
人乃愛はちり故小学術
ありて篤し今人情薄く志し切
か仕より勞ね厭ひ簡を好く小利
速くふるくこと成欲するの
不へ右は乃如

あへは悟りするものあはべうら今ハ師の方
より途は啓て初学の老ぬも極は
況中セを帰善する所は志ありれを
執る是はひくのくかくれごとくす
於退屈し止志多し以才不理ハ高上
よ成る古人を足しす終は為る
居ちる天へ上於工夫をまゐるのこれ
あは時の勢いなる人故辱くはる故術
するがごとくそ邪不ゆくは氣を抑へ
そはひくすむの正氣を助るの

漁取こま
事ハ心を住むるにハ氣此示滞りて融和
せは未だ逐く本は忘るるハ可ちなり
向は於て終をべうはといふ不可なり
事ハ劍術此用をりそ月故持てハ作の理
何よよのくあはまる用を修むるよ
つは作故悟るこはようは作故悟る君乃
自在れこあは作用一源頭微向
理ハ執不悟るべはれし事ハ習熟よあ
されハ氣のく形自在なるハ事ハ理不

因^らく生^はれ^た礼^{あり}あるもの礼^{あり}あると此^れ、^この^まな^り
故^に礼^を以^て事^を修^へ心^を以^て礼^を
修^する、物の序^{あり}あり然^しも事^を習^熟し^て
礼^をおさまり礼^をさ^す礼^をこ^しあ^らま^しみ^んん^ん
棹^をと^りて船^を走^らふこと大^に修^なは^し
依^らず^して^し何^の工夫^をを^らな^さん^や只^は
不^習熟^して^し大^に入^りて^し死^にま^り
礼^ゆへ^に礼^を定^めて^し此^を自^在に^あら^しめ^し推^し夫^の
の^まま^に荷^をつ^く細^きそ^のワ^を洛^に依^り
瓦^師の^天守^を不^登て^し瓦^をを^らな^さく^し皆^その^事に

習^熟して^しこ^のま^まに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
か^らず^して^し礼^を定^めて^し自^在に^あら^しめ^しこ^の
ち^りに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
ん^に徹^して^しま^まに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
か^らず^して^し礼^を定^めて^し自^在に^あら^しめ^しこ^の
化^應用^をを^らな^さく^し自^在に^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
礼^の修^練を^らな^さく^し自^在に^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
あ^らま^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
ま^まに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^しこ^のま^まに^あら^しめ^し
ね^らず^して^し妙^用を^らな^さく^し不^測な^らず^して^し皆^その^事に



思ふてはるべき事ありあはれ申てかへき者よあり
 以師を侍よる事こそ何れ自修の功績て
 自然なる事なれ師ハそ及縁故侍執事と
 ちり容易小論とて何れ故不を以稀也
 一向く同郷くば我こそき去れ終くくはる
 うさされの乃欵ハ
 回何ぞはるべうさぎん聖人よさへ學びてお
 取べし忍マ劍術此一小藝をや夫劍術ハ
 大伴氣此修練ちり故に初學より事
 以て凡そ終やむ初學より事故離れて

新編 卷一

元成終する時ハ空ありてこころむへき所
なり一氣を終すること熟して心よを遣すべ
此君此運速ハ生實の利純ふするべし人の
妙用成知ことハ易くも乃道は徹して變化
自在を成はることハ難し一 劍術ハ生死の條ニ
用ふ此術あり生を執りて死を執りて
ハア少く死生を以てニツホセざることをハ
死生を以てニツホセざるものよく自在
成るべし

向流ハ存留生生死起收一ノ教者ハ

劍術ハ自在なるべき教

曰修习の之主を夫なり彼ハ輪廻成厭ハ
寂滅成始して初より心成死地不投して生
死を脱却するは老なり故も多勢乃教の
中よありて此成ハ微塵不ちるも念を
執るも亦もハ善くすべし生の用ハ心ハ
唯死成厭ハざるのハ聖人死生一受
とりハ是ハ不異あり生ハ生不何セ死ハ死不
するをく此成ニツホセハ唯美の在形ハ
隨くも乃成る人のく是を以て自在成

生死のじり

一向生死の心あることハ一ちり然るれん生の
用はまさしく此ハ自在故を以てハ何レも
同初よりん故用は不異なり彼ハ寂滅を
主として生の用はよんを唯一死故とする
不れ故よ生れ用おいてハ自在を以て
とあるは聖人の学ハ死生故以て二のよ
せん生おあつてハ生れ死故尽一死よ當
つて死れ乃をつて一毫もえ故作
念を動するこくち一故不生よおいて

自在故を以て死よおいても自在故を以て彼
造化を以て知ある人留世を以て
泡裂と以て故不生乃死故尽一死よ當
て此学故を以てとて一それ平生れハ相
心くも入る一父子故離は天乃故廢
爵禄故班を以て備と没多ハ聖人の礼樂
刑改を以てると嬰兒乃戲故死るり如
心つて平生持て用ひさるの剣戟何ぞ此
よんあらん死おあつて生故怖る一
切を向れん乃新變を執るハ此

一向古來劍術者乃禪傍に造てそ極外を
悟りてと執志あるハ何ぞや
同禪傍の劍術乃極外に傳へしるはあ
れ只今よものまよと化はす物に應は生
老惜せるゆへそ之の生に困りて三畏
實窟乃ごごご一心顛動するときハこの生
にあやす象こそな志め以の彼毎年この
藝術に志し極く寢席に安んせん其
お殊つて事な尽し猶及此るふおいて心
狂いおごり并も以懐満しくと年月を送

西へ禪傍に造て生死の理に自悟し方
は惟心乃所變ある所故めて心しらまら
よひし事神にこまりこのび所故にまれて
此自在にまはれものなりこれ多年を以て
一事ふら極んそ其うつ六もの故に
そのなり一旦おしてほおはあれ禪の理
師かふ一指乃下に并悟ししつふ此
は同し倉卒の事よあれ藝術未熟の
老名傍知識ふをこりしと并悟すとき
よありべ

此本空言ヲ以天狗藝術論ト題シテ能事理
童蒙ニホトサシムル事深切ニミテ諸ノ道ヲ學子ノ一
助タリ讀者意味ヲ深クサツスハシテ予モ多
年文ヲ學テ正テ遊テ少ク其味イテ覺ルニ
善哉此戲書能養良ヲ演タリ去トモ藝術
其修行ニ至テハ不_レ宜_レ用ニカ

三カトモ拾六文ニテ天地運動ノ理ヲ藝ヲサ
天狗藝術論卷一終焉

天狗藝術論
アノト云

